

〈大宮〉考

——神の名から人称へ——

土居奈生子

一 はじめに

平安中期以降に成立した、いわゆる作り物語にはしばしば〈大宮〉と呼ばれる人物が登場する。同時期、仮名文学作品、あるいは公家日記といった記録性の高い史料において、実在の人物に対し「大宮」と表記する（呼ぶ）ことも見られるようになる。後者、実在の人物に対する呼び方、つまり人称としての先行研究には、まず米田雄介氏の論考を挙げるべきであろう。^①論者は「作り物語」を研究する立場から、第二に高田信敬氏の論考の注記にも注目している。^②右の先学に導かれつつ、『源氏物語』に登場する〈大宮〉について考察を行った。^③一連の考察により、同物語内における〈大宮〉の共通性や役割の一端を見いだせたとと思う。だが同時に、他の作り物語に登場する〈大宮〉、あるいは実在の人物に対する呼称用例にも触れ、そこに新たな疑問が生じ、可能な限り調査、整理し、考察する必要を強く感じた。次から次へと疑問が生じる根幹には、この語の持つ「重さ」と「柔軟性」があるう。律令などに基づく明確な身分・地位規定をもたず、一見、天皇を祖先に持つ親族集団、あるいは

は天皇を中心とする親族集団の中で、日常、何気なく用いられる呼称のひとつのようである。しかし用例の見られる文脈上では、「大宮」の語が、后や親王、内親王といった公的身分を有する人物を呼ぶ呼称として、いくつが存在する他の呼称のうちから意識的に選択されて使われている可能性が高い。

そこで本稿では、まず『源氏物語』以前に成立した作品、実在した人物に対する「大宮」用例の分布を確認したい。そこから更にさかのぼり「大宮」の語が人に対して用いられ、書きとどめられるようになっていく前の時代の様相について、「宮」の用例とともに「大宮売神（オホミヤノメノミコト）」なる女神の存在を手掛かりに考えてみたい。

二 人称「大宮」の用例分布

『源氏物語』成立以前に実在した人物に対し使われている例を、その人物の在世が早い順に列記する。

- (一) 藤原穩子（醍醐帝后） … 『延喜御集』（二例）
- (二) 昌子内親王（冷泉帝后） … 『冷泉院御集』（一例）

『石山寺縁起』(一例)

『小右記目録』(二例)

(三) 藤原彰子(一条帝后) … 『紫式部日記』 『大鏡』 『栄花物語』

『左経記』 『御堂閔白記』

(一) の『延喜御集』、(二) の『冷泉院御集』の用例は、どちらも詞書に見られる。前節に挙げた米田氏の研究は歴史学の立場からのもので、両集を含め国文学の資料中の用例については言及がない。また米田氏は(二)の『石山寺縁起』『小右記目録』について、後世(太皇太后Ⅱ大宮と認識されるようになった平安・鎌倉時代)の編集時点での知識に基づくとする。そこから(三)の『紫式部日記』を除いた用例を持つて「大宮の称の成立期」とし、やがて「太皇太后宮の称として定着するようになった」と言う。

米田氏の論考は、人稱としての「大宮」がいわゆるキサキの別称であることを前提としている。そこからキサキはキサキでも、どのキサキを指しているのか、に論点は絞られる。本論では、そうした前提そのものを一度取り去り、考えたいと思う。

次に、いわゆる作り物語の人物に関し用いられる例を挙げる。

(1) 『うつほ物語』…嵯峨院の女一宮・その母大后の宮

(2) 『落窪物語』…故大宮

(3) 『源氏物語』…左大臣妻・弘徽殿大后・式部卿宮・明石中

宮

『源氏物語』をはじめとした作り物語を扱う者にとって、「大宮」と呼ばれる人物達はなじみ深い。ところが、このように資料の範囲

をひろげても意外と用例は少なく、時代をさかのぼっていかないものである。また、実在の人物の場合、社会的身分がキサキの範中に収まるのに対して、作り物語の場合では、親王・内親王にまで拡がる点に注意したい。性別においても、女性の印象が強いが、男性にも使用されるなどバリエーション豊かである。

また、用例が少ないからと言って、その前の時代で人に対し使われていなかった、それが平安中期になり急に使われるようになった、とも考えにくい。書かれる前には、ある程度、社会の中での一般的な使用が想定されよう。

三 「大宮」用例の周辺

この想定についておさえておきたい。すでに「大宮(於保美夜)」の語は、上代に「御殿・皇居」の意味で存在し、「大宮人」「大宮所」といった派生語もあった⁽⁵⁾。語構成は「オホ(大) + ミ(美) + ヤ(屋)」「オホ」も「ミ」も美称の接頭語であるから、建物の意味する「ヤ」以外は特定の意味を持たないことになる。ここに冒頭で述べた「重さ」「柔軟性」が生じると考えられる。

また、語自体に性別を表すような要素はない。後述する「大宮売神」が「メ(女あるいは妻)」を持ち、『古事記』に登場する屋敷の神「大屋毘古神(オホヤビコノカミ)」が「ヒコ(彦)」を持ち、それぞれ女神、男神であることが了解されることから、それは明らかである。

「ミヤ(宮)」の語に注目すれば、上代にはやはり「御殿。宮殿。

天皇や后・皇子の住居。ミは接頭語。ヤは屋⁽⁶⁾とあり、住居用の立派な建物を指し、特に天皇を中心とした親族の住居に対し用いられていたことが了解されよう。ここから後に、その建物に住まう貴人を指す語として用いられるようになった、と一般的に理解されている。そこに異議はないのだが、いつから人に対して用いられるようになったのだろうか。

『時代別国語大辞典 上代編』「きさきのみや」の【考】の件に、「尊³皇后」、曰³「皇太后」(綏靖紀元年)の「皇后」に対してキサキの訓が付せられているが、同じ個所にキサキノミヤの訓を付すものもある。これによれば、皇后もしくは皇后の地位をキサキノミヤと呼ぶこともあったようである。(二四〇頁)

とある。皇后の御殿を指す「皇后宮」「後宮」に対してキサキノミヤの訓が付されている用例にまじり、「皇后」二文字に対しキサキノミヤの訓を持つ用例への指摘である。

大野晋氏によれば、『日本書紀』諸本の訓読は、一般に文章の語句すべてを和訓していた。ところが現在残されている和訓は、万葉仮名表記を持つ語をのぞけば、平安前期において日本書紀の講書が行われていた頃のものとは分析されている。講書に用いられた訓と、当時、一般的に使用されていた訓はイコールでないため、古体を示す訓ももちろん含まれている。⁽⁸⁾

先に引用した『時代別国語大辞典』が挙げる綏靖天皇元年の条、「尊³皇后」、曰³「皇太后」は日本古典文学大系では「皇后を尊³びて皇太后と曰³す」と訓み下されている。「天皇即位の年の記事に先帝

の皇后を皇太后とする記事をおく」「書紀の通例⁽¹⁰⁾」文であり、続く安寧天皇以下、卷三に記述がある天皇の元年の条には同文が確認でき、同じように訓み下されている。「皇后」に「キサキノミヤ」の訓を持つ伝本がどれであるのか、『時代別国語大辞典』には示されていないが、訓の主流でないことは間違いない。

平安時代前期の仮名作品に目を転ずると、『伊勢物語』第四段、①「むかし、ひんがしの五条に、おほきさいの宮おはしましける、にしのために、すむ人有(り)けり⁽¹¹⁾」。あるいは『古今和歌集』卷第七・賀歌・歌番号三五一の詞書②「さだやすのみこの、きさいの宮の五十の賀たてまつる御屏風に、∴(後略)」、卷第十七・雑歌上・歌番号八七四の詞書③「寛平御時、うへのさぶらひに侍(り)けるをのこども、かめをもたせて、きさいの宮の御方に、『おほきさいのおろし』と、きこえにたてまつりたりけるを、∴(後略)」、卷第十八・雑歌下・歌番号九六六の詞書④「みこの宮のたちはきに侍(り)けるを、∴(後略)」などが人に対して用いられている例として挙げられる。

二つの作品には、もちろん「宮」の例が他にも見られるが、「御殿」の意であり、「御殿」の意での使用の方が多数を占める。『古今和歌集』に「寛平御時后宮歌合」をもととし所収されている和歌、それに付される詞書についても「在民部卿家歌合」の如く主催場所としての意味割合が高いと判断した。「意味割合」などと回りくどい表現をしたが、違う言い方をすれば「主催場所」「主催者」双方を意味する語としても使用され始めていることになる。

以上から考えると、「宮（ミヤ）」の語が人に対して用いられるようになったのは、平安時代に入ってからということになる。しかもはじめは『日本書紀』の訓や①③の用例に見られるように皇后の居所を指す「后宮（キサキノミヤ）」から皇太后、あるいは皇后であるキサキ本人を指すようになった可能性が高い。ついで「みこの宮」、つまり皇太子を指し、さらには親王や内親王といった人々にまで使用範囲が拡大していったのであろう。

背景には、唐の長安にならった平安京にいたり、遷都することなく内裏を中心に都（都市）が整備され、居住地域が大略名とともに固定化していったことがあると思われる。しかし、この一語の傾向をもって都市論を展開することはできない。

「宮」の語が人に対して使用され始めれば、まもなく「大宮」の語についても人への使用が始まったものとみなしうる。先の引用中に出てきた「皇后」「皇太后」、あるいは神の名にも見られるように、似通った二者を区別する際、世代の違いや尊敬の念を込め「大（オホ）」を冠することは、しばしば行われていたからである。

四 大宮売神

「大宮売神（オホミヤノメノミコト）」という女神は、もともと丹後の地にまつられていた。『古事記』『日本書紀』に、その名は見られず両書成立時期より間もない頃、朝廷に取り込まれたらしい。『古語拾遺』に斎部の祖先神として、『延喜式』に宮中八神の一柱、また造酒司の神として登場する。文献上、その名前を確認できる時

期が、前節において検討した「宮」の語の人への使用が始まった時期と重なること、〈大宮〉には女性が多いこと、主にこの二点から〈大宮〉を考える際の手掛かりになるのではないかと調査・考察を試みる。

「大宮売神社」は京都府京丹後市大宮町に現在もある。本社に「大宮比売命」「若宮比売命」を祭る。創立年代は未詳だが、近代以降の考古調査から境内全体がかなり広い弥生遺跡の上に乗っていることが確認されており、この遺跡を母胎とした非常に古い、全国的にも珍しい神社と言われる。

『日本三大実録』貞観元年（清和天皇・八五九年）正月二十七日の条に「丹後國從五位下大川神、大宮売神に並びに從五位上」とある。『延喜式』卷第十・神名下に(3)「丹後國六十五座」「丹波郡九座」「大宮売神社二社（名神志）」とある。卷第三「臨時祭」にも同様の記述があり、同地の主要な神であったことがわかる。先の遺跡調査とあわせ、その古さが裏付けられる。

さらに『延喜式』の他所に目を転ずると、卷第九・神名上に宮中に祭られる八神の一柱として、また造酒司の神としても位置づけられている。八神として神祇官西院のほか、伊勢斎宮の野宮、大嘗祭の八神殿においても祀られる。そのため、卷第一、二・四時祭上下、卷第五・斎宮、卷第七・踐祚大嘗祭、卷第八・祝詞（祈年の祭・六月の月次の祭・大殿祭）などに、その名が散見される。つまり(1)宮中八神、(2)造酒司の神、(3)丹後地方の神、それぞれ三柱の神の名があつてよさそうところ、一柱の神の名をもって信奉されているの

である。

『延喜式』成立の前には、現在内容が残っていない、『貞観式』、さらには『弘仁式』があつた。その内容を推測できるものとして、篇目を手掛かりに比較すると、神名、齋宮、踐祚大嘗祭、祝詞については『弘仁式』にすでに見られる。つまり、先に『延喜式』の記述として引用した(3)に関する部分、また次に引用する記述についても式の編纂が始まった平安時代初期の頃にさかのぼり得ると考えてよいだろう。

宮中の神三十六座

神祇官の西院に坐す御巫らの祭る神二十三座（みな大、月次・新嘗）

(1) 御巫の祭る神八座（みな大、月次・新嘗、中宮・東宮の御巫もまた同じ）

神産日神	高御産日神	玉積産日神
生産日神	足産日神	大宮売神
御食津神	事代主神	

…中略…

(2) 造酒司に坐す神六座（大四座・小二座）

大宮売神社四座（みな大、月次・新嘗）	酒弥豆男神
酒殿神社二座（みな小）	酒弥豆女神

（『延喜式』卷第九・神祇九・神名上、五〇七〜五〇九頁）

大殿祭

高天の原に神留り坐す皇が親神魯企・神魯美の命を以ちて、皇御孫の命を天つ高御座に坐せて、…中略…、神直日命・大直日命、聞き直し見直して、平らけく安らけく知ろし食せと白す。(4) 詞別きて白さく、大宮売命と御名を申す事は、皇御孫の命の同じ殿の裏に塞がり坐して、参入り罷出する人の選び知らし、神たちのいすろこひあれび坐すを、言直し和し（古語に夜波志と云う）坐して、皇御孫の命の朝の御膳・夕べの御膳に供え奉るひれ懸くる伴の緒・襷懸くる伴の緒を、手の躰い・足の躰い（古語に麻我比と云う）なさしめずて、親王・諸王・諸臣・百の官の人どもを、己が乖き乖きあらしめず、邪しき意・穢き心なく、宮進めに進め、宮勤めに勤めしめて、咎過ちあらむをば、見直し聞き直し坐して平らけく安らけく仕え奉らしめ坐すによりて、大宮売命と御名を称え辞竟え奉らくと白す。

（『延喜式』卷第八・祝詞、四七一〜四七五頁）

祝詞としては「祈年の祭」「六月の月次の祭」にも「大宮売神」の名が見られる。そこでは上段に引用した(1)宮中八神の名を「神産日神」から順に唱えるのに対し、「大殿祭」では(4)のように「大宮売神」に対する詞章が特に設けられていることに注意したい。この点について虎尾俊哉氏は「祝詞は二段構成となつているが、本来は前段だけで、新たに宮殿が造営された時にこの祭が行なわれ、この祝詞が読まれたのであろう。その後、神今食・新嘗祭・大嘗祭の前夜や齋宮・齋院卜定の後などにも、宮殿を鎮める意味でこの祭が行

なわれ、この祝詞がそのまま用いられたと考えられる。そしてその間に後段の詞章が付け加えられるようになったらしい」と指摘している。首肯すべきだろう。スペースの関係で前段はほとんど引用を省略したが、それは宮殿造営に関わる詞章で満ちている。一方、引用(4)以下の後段は、造営された宮殿内で、主である天皇と神々、人々との融和を大宮売神がはかるという内容である。前段がハード(建物)に関するものであり、後段がソフト(人間関係)に関するものであるとも言え、質的にずいぶん異なっている。

この「大殿祭」は次の「御門祭」とともに齋部氏が宣説する。また注記「〔古語に「云う」〕の特徴から、齋部広成撰『古語拾遺』(大同二(八〇七)年成立)との共通性も虎尾氏により指摘されている。『古語拾遺』において大宮売神が登場する場面を確認しよう。

仍りて、太玉の命・天児屋の命、共に其の祈禱を致す。時に、天照大神、中心に独り謂はさく、「比吾幽り居て、天下悉くに闇けむを、群神何の由にか如此歌染ぶ。」とおもほして、戸を聊かに開きて窺す。爰に、天手力雄の神をして其の扉を引き啓け、新殿に遷り座さしむ。則ち、天児屋の命・太玉の命、日の御綱(今、斯利久迷繩)といふ。是、日影の像なり。を以ちて、其の殿に廻懸らし、大宮売の神(是、太玉の命の久志備に生みませる神なり。今の世に内侍の善き言・美しき詞をもて、君と臣との間を和けて、宸襟を悦懌びしむる如し。)をして御前に侍はしむ。豊磐間戸の命・櫛磐間戸の命の二はしらの神(是、並、太玉の命が子なり。)をして、殿門を守衛らし

む。

〔古語拾遺〕四四(四五頁)

天照大神が天の石窟にこもってしまい、そこから再び外へ出てくる場面である。繰り返しになるが、『古事記』『日本書紀』のこの場面に大宮売神は登場しない。

引用の少し前から説明すると、素戔嗚尊の乱行に怒った天照大神は天の石窟にこもり、世の中は暗闇となる。八十万の神は天の河原に集まり、思兼の神を中心に天照大神を石窟から出そうと策を練る。そのとき鏡をはじめとした多くの道具類が造られるが、『古語拾遺』の場合、それらの中に「瑞殿(美豆能美阿良可)」なる建物がある。引用部分に、天照大神が天手力雄の神により外に出された後、遷された「新殿」がそれに相当する。最終的にすべての道具類が整い、天鈿女の命を歌い舞わせ、太玉の命により鏡にまつわる誘い文句が唱えられ引用部分へと続くのである。「太玉の命」は齋部氏の祖先神、「天児屋の命」は中臣氏の祖先神とされる。

出てきた天照大神は「新殿」に遷り、「其の殿」に天児屋の命と太玉の命が斯利久迷繩をひきめぐらし、「大宮売の神」を天照大神の御前にさぶらわせた、という。

天照大神が、もとの石窟に戻らないよう斯利久迷繩を後ろへ引き渡した、とされる『古事記』『日本書紀』の記述とずいぶん趣が異なる。大宮売神は注記により太玉の命が生んだ神とされ、齋部氏の祖先神に連ねられる。天照大神の御前に奉仕する、その具体的な役割についても注記に平安時代初期の「内侍」と同様の旨があり、天照大神と他の神々の融和をはかる仲介的なものようだ。古代の神

を後代の朝廷内の職掌により説明するという奇妙な叙述である。

また、「瑞殿」については「大殿祭」の前段に同様の語が見られる。そこは斎部氏が主体となつて「皇御孫の命の御殿」を造営する条である。つまり『延喜式』祝詞「大殿祭」と『古語拾遺』の天照大神の天の石窟にまつわる段は、注記という表記上の特徴と共に、内容的な類似性も指摘できる。

他の箇所では、やはり(1)に引用した八神の一柱として「高皇産日」から順に列挙される。八神に続き別の四神の名も示される。十二神の名が列挙されるわけだが、別の四神の名は引用(1)と(2)の間、中略部分に見られる神々なので、体系的な類似も確認できる。

そのためか、近代より現在に至るまで、大宮売神の性質については研究者間で意見が分かれている。主なものについて藤原茂樹氏の整理⁽¹⁹⁾に基づき、論者の確認した先行研究も加え、折口信夫氏の見解以下、次に示しておく。

★「大宮乃売 御殿の神、宮殿の精霊。女と考えて「おほみやのめ」という。つまりある時代到大御巫が最も大切に仕えた神。女が仕えたから、女と考えたのである。八神殿に仕えている巫女が祭られて、神となつたのである。本当は、神道の学問のうえで疑問の神である。(中略)

「め」は、妻ということ、⁽²⁰⁾「ひめ」とは違う。ただの女ということではない。だから本当は、宮殿の精霊にしても、「大宮乃売」とはいえない。つまり「め」ということがある以上、神は男で、その妻ということにちがいない。そこで「ひめ」と

「め」とが区別される。宮殿の精霊の「つま」。なぜ「ひめ」といわぬかという、巫女であつて、それから神格化した神だからだと思ふ。で、われわれの国では、「大宮乃売」というのは、何かへんな神である。生き神であつたかもしれない。大宮の神があり、それに仕える巫女、宮殿の精霊に仕える巫女なのだ。社々にある姫神というようなものだ。社の古い時代の巫女が、神格化して祭られるようになる。歴代の巫女もその姫神を通じて、信仰的に生きている。それで、巫女が同時に大宮の精霊の形になつてしまった。本当は、「大宮乃売」のほかに、大宮の神があるわけだ。

ところで、「大宮乃売」と天子との関係がわからない。屋船神(大殿祭)などという種類のものとは違うらしい。そのことは代々の合理化を経てきているから、後のことではわからない。八神殿の中で第一位の神といふべきものでありながら、その素性がわからない。八神殿の神を解剖してみても結局わからない。「大宮乃売」には疑問がある。⁽²¹⁾(折口信夫)
「忌部氏の関与する宮殿の守護神」(津田左右吉)⁽²²⁾
「忌部氏が⁽²³⁾大宮売神を同氏の建造する宮殿の守護神とし、また内侍の尊崇をも得ていた」(西宮一民)⁽²⁴⁾
「宮廷を守護する女神」⁽²⁵⁾「宮殿のなかの神々を祭祀する巫女の神格化」(斎藤英喜)
「宮中の平安を守る女神らしい。忌部氏によって祀られてきたものであろう」(虎尾俊哉)⁽²⁶⁾

★「新嘗の準備に奉仕する女神」(三品彰英)⁽²⁵⁾

「新穀で神饌と神酒を作り、神に供える斎女の神格化」(松前建)⁽²⁶⁾

「後二説(三品・松前説を指す。論者補)に従う」(藤原茂樹)⁽²⁷⁾

★「宮中内の諸事を掌る神で、宮中造酒司神でもあった」(中村幸弘)⁽²⁸⁾

先に見た「延喜式」宮中八神、あるいは祝詞と「古語拾遺」の記述をもとに、大宮売神が倭を基盤とした朝廷の宮殿とともに成立した(認識された)と考えると折口氏から虎尾氏のような捉え方になる。同じ「延喜式」であつても造酒司の神であることを重んじれば、三品氏から藤原氏のような捉え方となる。特に藤原氏は、大宮売神が丹波に出自をもつことを重視し、垂仁天皇の頃、丹波信仰が宮廷信仰の中に吸収され、その丹波信仰の残存を『延喜式』中の大宮売神に見出している。宮殿内で天皇と人々との融和をなすとされる面については本来の大宮売神なり、丹波信仰からすると「いささか権威が拡張しすぎて」おり、「忌部を通して忌部サイドの祭り上げが進みすぎた」と見ている。

ここまで全体を通じて考えると、まず丹後地方に大きな勢力があり、そこでは大宮売神なる神を主神(国霊)として祀っていた。この勢力は大和朝廷が『古事記』『日本書紀』をまとめる以前より、倭を中心とした勢力(後の大和朝廷)と交渉を持ち、関係を築いていた。この関係は主として婚姻によるもので、その一端が開化天皇の頃の竹野媛に関する記事、垂仁天皇の頃の日葉酢媛姉妹の記事に

うかがえる。⁽²⁹⁾ 関係を強化する過程で大宮売神は、倭側の勢力内へ持ち込まれ、重視されるようになったのである。重視され、八神の一柱と位置づけられるまでに斎部氏の関与があつたかもしれない。またもともと持っていた性質から造酒司の神として祀られるようになったのかもしれない。やがて具体的に祝詞として唱えられ、祭られ、『古語拾遺』『延喜式』に至り、その名が書きとどめられるようになった。三つの面を持つていたが、互いの関係を説明できる伝承は失われ、その名のみが共通するかたちで示されていたのである。本稿では、大宮売神の性質を明らかにし神々の体系に位置づけることを目的としていないので、右を踏まえ、(大宮)の視点から気がついた点をいくつか挙げておく。

まず、丹後地方の主要神であつた大宮売神が、丹後地方出身のキサキによって倭(後の大和朝廷)にもたらされた可能性が高いことである。自らの勢力外で奉じられてきた神をどのように祀るか(あるいは排除するか)は大変デリケートな問題である。『古語拾遺』にも天照大神を伊勢に祀るにいたるいきさつが、神との同居を避けることに求められている。竹野媛あるいは日葉酢媛姉妹といった丹後出身の女性達が奉じる出身地の神についても、受け入れられる倭側に同様の危惧が生じてもおかしくない。だが受け入れ側の倭の人々にとって、その名は大変受け入れ可能なものであつたのではないか。

「大宮」は、自分たちが「天皇」あるいは「皇御孫」として仕える王の居所であり、「売」が、先の折口氏の見解にあつたよう「妻」の意で捉えられれば、キサキその人の神となるからだ。日々、キサ

キを中心とした女性達が大宮売神を祀り、また夫たる天皇の治世を支えたとしたら、その信仰は丹後出身の女性に限らず拡大し、宮廷内で継統されることになる。キサキを発端とした人々の交流の中で造酒の知識や技術がもたらされたとしたら、大宮売神のおかげとなり、その後、丹後出身のキサキやそれをとりにまく集団が失せても、同神が祀られながら宮中で造酒が行われることも十分、考えられる。そこではそもそも大宮売神が丹後で祀られる際に必要とされた性質や、起源である丹後の地とのつながりも問われなくなる。キサキの神、あるいはキサキを中心とする女性達が信奉する神として重要な位置を占めることになるわけだ。

実際がこれほど単純でなくとも、女性を介して倭側へもたらされたこと、その後、あまり時を経ずして倭内でも重視されるようになったこと、丹後地方の主要神との切り離しも速かったこと、倭内では女性を中心に信奉されていたことは間違いないだろう。丹後地方との関わりが絶たれ、それを具体的に知る者が倭側にいなくなり、大宮売神がますます重視される状況をうけて齋部氏がその神を祖先神として取り込んだと考えられる。あるいは丹後出身の人々が倭側へ持ち込もうとした時点で、齋部氏は祀り方などに関わり、倭側で重要視されるべく導き、取り込みながら信奉するようになった可能性も考えられる。

いずれにせよ、齋部氏も自らの祖先神として取り込むにあたっては、丹後の地に起源を持つことや、そもそも持っていた性格などから切り離して、同神を新たに据え直す必要があったはずである。や

はり「大宮」という名の下に、宮殿造営に関わる祝詞の中に入れる、それが最初ではなかったか。だがすでにある祝詞の中に、具体的な役割を持って混入するようなことは難しく、新たな祝詞を付け加えた。造営後の宮殿にあつて人々の融和をはかり、主たる天皇を守護する神として、である。

この性格づけがいかに希薄なものであったかを示すのが、『古語拾遺』に見られる注記である。祝詞と同様に「大宮」の名の下、宮殿造営の関連から天の石窟の物語の中に組み込み、「太玉の命」が生んだ神と紹介したまではよい。ところが本文に「御前に侍」らふとされる役割は、注記で「今の世に内侍の善き言・美しき詞をもて、君と臣との間を和げて、宸襟を悦懼みこころびしむる如し」と、祝詞「大殿祭」にあつた「言直し和し」を内侍の職掌に例えることで精一杯である。「売神」であることを、説明しようとするほど、当初「大宮」の語に接点を見出そうとしていた宮殿造営とは異なり、具体性に欠けるものとなつてしまつてゐる。

つまり齋部氏によつて大宮売神の祭り上げは進んだかもしれないが、その解釈や性格付け・意義付けといったものはさほど進まず、名称から連想される範囲にとどまつていたのである。それが式を編纂する時局にあたり、あるいは、中臣氏に対する齋部氏の主張を唱えるにあたり、あらためて問い直され、勢い、当時の「内侍」を例えとする注記を生み出した、そんなところではなかったか。だが、大宮売神の役割が、一旦、当時の「内侍」の役割に例えられ、その考え方をベースに式の編纂という長い事業の中、神事においても儀

式次第その他とともに記録されることになった。そうなれば、当の内侍、内侍司の女官達は大宮売神を身近に感じ、その神のもと自分達の日常の職務や行為が成り立つと考えよう。あるいは監視されていると感じるような畏怖の念を含めた信仰を持つようになる。伝説的な上代の頃より長い年月をかけ、丹後出身のキサキを中心とした女性集団から大宮売神は切り離され、齋部氏による祭り上げが進んだ。その末に、書記言語による記録化と公表（主張）があり、再び朝廷内の女性集団の中にその存在が意識され、信仰が取り戻されることになったのである。

五 結び

齋部広成により『古語拾遺』が撰上されたのは大同二（八〇七）年、平城天皇の御代であった。齋部氏により「大宮売神」が「内侍」に結びつけられた三年後には、嵯峨天皇の御代に変わり、新たに藏人所が設置される。平城上皇はまもなく出家、尚侍藤原薬子は解任の後、自殺した。いわゆる薬子の変である。齋部氏が平城天皇のそばで権威をふるう薬子に大宮売神の姿をイメージした結果の注記であったのか定かではない。

しかしその直後、内侍司に仕える女官達は自分たちの立場、存在あるいは職掌が何たるかを問われる事態に陥った。ほとんど時を同じくして行われた、各式における大宮売神の明文化、それに連なる存在であるという祭祀の家からの物言いは、大いに救いとなったと考えられる。

平安時代の幕開けから、式の編纂が幾度と繰り返された間、大宮売神は式の神事・儀礼の次第に基づき宮中や伊勢の齋宮に祀られ、内侍たちの拠り所ともなっていた。同じ平安時代も進んでいくと、次第に「宮」に住む人々、特に「皇后（キサキ）」を発端として、「宮」と称することも行われるようになった。

物語における〈大宮〉をより明らかにしたいと、「大宮」の語が人に対する用例として確認できる以前、平安時代初期の様相を「宮」の用例、「大宮売神」の用例を手掛かりに考察してきた。やや時代をさかのぼりすぎた感もあるが、一つ明らかにしたのは、「宮（ミヤ）」と呼ばれる建物と女性との結びつきの強さである。人への使用が、「后宮（キサキノミヤ）」から始まる可能性を指摘した。「大宮売神」は「売」をもって女神であることが始めから示されていた。「売」がわざわざ示されることから、折口氏の言う「大宮の神」なる男神の存在も考えられようが、そのような神は確認されなかった。「大宮」つまりは天皇の住む宮殿、その主である天皇その人を「大宮」と呼ぶことも行われてはいない。そこから逆に女神であることが必然であったかの印象を受ける。

立派な御殿には女性が住み、女性によって建物はもちろん、そこに暮らす人々も守られるといった確固たる考えの根深さ、根強さ。これもまた一種の信仰と言えるものかもしれないが、それを垣間見た思いである。この根強い考えが、さらに時代を経て作り物語に〈大宮〉と呼ばれる登場人物を配し、受け入れる素地ともなっているように。

注1 米田雄介「大宮管見」『日本歴史』278、昭和四十六年七月

2 高田信敬「大齋院名義考証」『創立三十周年記念 鶴見大学文学部論集』平成五年三月

高田氏は右の論考で、注1の米田論文は「大宮」が近世に至るまで太皇太后をさしたことを例証する。ただし『紫式部日記』以下国文学の資料に言及するところ少なく、なお補訂の必要がある（注31、四六頁）と指摘している。高田氏は、「大齋院」の考察を通じて「大（オホ）」に言及し、そこで「次代の存在を前提とし先行する代に冠して用いること、先に記したように「大」の機能の一つだが、他にも種々の役割がある、またそれがどの用法なのか解しにくいものも存する。いくつか例示すると、まず「大宮」。皇太后、太皇太后の称とも老いた宮の称とも注されるし、その通りで済ませうる例もあるうが、次世代の、すなわち子の存在によってその母が「大宮」と呼ばれることがある」（四〇頁）とし『紫式部日記』での藤原彰子の例を挙げている。

『紫式部日記』中の（大宮）の用例は、中宮である彰子に対するもので、皇太后、太皇太后の称とは言えない。右の高田氏の指摘は、萩谷朴氏の『紫式部日記全注釈』上下巻（角川書店、昭和四十六、四十八年）上巻、四五〇頁下段末、下巻、四一四頁上段末における見解とも一致している。

3 『源氏物語』左大臣の妻（大宮）について、高橋亨編『源氏物語と帝』森語社、平成十六年六月

『大宮』考―『源氏物語』とその前後―『静大国文』44、平成十七年三月

『源氏物語』（大宮）考―弘徽殿女御の場合―『文学・語学』（全国大学国語国文学会）81、平成十七年三月

『源氏物語』（大宮）考―明石中宮の場合―『國學院雜誌』106-5、平成十七年五月

『第三部における女三の宮―（大宮）たる明石中宮と女二の宮の降嫁―』人物で読む源氏物語、女三の宮、上原作和編、勉誠出版、平成十八年五月

『源氏物語』（大宮）考―式部卿宮の場合―『古代中世文学論考』第十九集、古代中世文学論考刊行会編、新典社、平成十九年五月

4 注1の米田論文、第五節。

5 注3の拙稿「大宮」考―『源氏物語』とその前後―（『静大国文』44、平成十七年三月）を参照してほしい。

6 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、平成十九年十一月

7 『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、平成十九年十一月

8 大野晋担当「三 訓読」『日本書紀』上（日本古典文学大系新装版、岩波書店、平成五年九月）を参照。

9 『日本書紀』上（日本古典文学大系新装版、岩波書店、平成五年九月）二二二頁。

10 『日本書紀』上（日本古典文学大系新装版、岩波書店、平成五年九月）二二二頁の頭注二四。

11 『伊勢物語』の本文は、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、平成八年十月）による。

12 『古今和歌集』の本文は、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』上・下（右文書院、平成八年十月）による。

13 『大宮』考―『源氏物語』とその前後―（『静大国文』44、平成十七年三月）を参照してほしい。

14 門脇禎二「旦波（丹後）王国」と「倭王国」―丹後の大宮禿神・羽衣天女―『古代日本の「地域国家」と「ヤマト王国」』上、学生社、平成十二年三月

15 『日本三代実録』の本文は、武田祐吉・佐藤謙三訳『読み下し 日本三代実録』上巻・清和天皇（光祥出版、二〇〇九年九月）による。

16 『延喜式』の本文は、虎尾俊哉編『延喜式』上 訳注日本史料（集英社、二〇〇〇年五月）による。原漢文だが、右書の訓み下し文を引用した。以下同じ。

17 注16『延喜式』、「大殿祭」補注、九一八頁。

18 『古語拾遺』の本文は、中村幸弘・遠藤和夫共著『古語拾遺』を読む（右文書院、二〇〇四年二月）による。原漢文だが、右書の訓み下し文を

引用した。

- 19 藤原茂樹「ヒバスヒメ皇后と大宮売神―酒神の考察―」『山手国文論叢』一二（一九九一年三月）の「造酒司の神」の章を参照。
- 20 折口信夫「祈年祭」『折口信夫全集』ノート編・第九卷（中央公論社、一九七一年十二月）一八七―一八八頁。
- 21 津田左右吉「古語拾遺の研究」『津田左右吉全集』第二卷（岩波書店、一九六三年）五〇〇頁。
- 22 西宮一民「古語拾遺」(岩波書店、一九八五年三月) 七七頁。
- 23 斎藤英喜「大殿祭と大宮売命―その祭祀と伝承をめぐって―」『神語り研究』四（一九九四年七月）三三、四五頁。
- 24 注16、九一三頁。
- 25 三品彰英「大嘗祭の問題点」『古代祭政と穀霊信仰』（平凡社、一九七三年）四一九頁。
- 26 松前建「天孫降臨の司令者」『古代伝承と宮廷祭祀』（塙書房、一九七四年）五五頁。
- 27 注19、七頁。
- 28 注18、九九頁。
- 29 ここまでについては注14、門脇論文に詳しい。
- 付記 本稿は、二〇一二年八月に行われた古代文学研究会での口頭発表表「大宮売神」考（「大宮」考のために）に基づく。会期中、ご意見いただいた会員諸氏、司会を務めていただいた浅尾広良氏に感謝申し上げます。口頭発表にいたるまで、ピンチを何度も救っていただいた阿部好臣氏、口頭発表後に貴重なご教示を幾度もなくいただいた糸井通浩氏（両氏とも同会会員）にもあわせて感謝申し上げます。

（どい・なおこ 本学常勤講師）